

1. 教授要目

I 文系教養科目

東工大立志プロジェクト (Tokyo Tech Visionary Project)

谷岡 健彦 教授 弓山 達也 教授 中野 民夫 教授 佐久間 邦弘 教授 他

1-1-0 1Q

新入生全員の大学生活のスタートとなる科目である。

東工大の教育は、世界をリードし、変革していく人材を生みだしていくことを目標としている。そのためには自分の専門分野の知識や能力だけではなく、広く世界を知ること、そして深く自分自身を知ることが必要である。

現代世界に存在するいかなる問題にチャレンジし、どのような問題意識を持って、自分の中の隠された可能性を開花させ、具体的に行動していくのか。科目名にもあるようにひとりひとりがいかなる「志」を立てて進んでいくのかが問われている。

本講義は講堂での大人数講義と少人数クラスでの演習を有機的に組み合わせながら、世界が抱える問題を知り、仲間との協働の中で自分も活かし仲間も活かすような場作りを学び、大学での今後の学びにつながる展望を得ていく。大人数講義では、各界で活躍するゲストスピーカーの話を聴き、いま社会で何が起きているのか、知的世界で何が問われているのかを知る。少人数クラスの演習では、グループワークを通じて自発的に考え、問題を発見し、他者と合意形成するためのスキルを修得する。演習の最終回では、各グループで立てたテーマをめぐってプレゼンテーションをおこなう。また書評執筆のワークショップを通じて、本の読み方を身につけ、本に対する批評眼を涵養する。

本講義は、リベラルアーツ教育の必修コア科目のひとつであり、そのスタート地点に位置づけられる。本講義の後に様々な分野の講義を履修し、3年次での「教養卒論」でひとりひとりの成果を総括するに至る東工大のリベラルアーツ教育は、各自の目標に向かって志を立てるプロジェクトとしてとらえることができるだろう。そのプロジェクトの出発点として、そこに必須の知的潜在力を掘り起こし、社会的視野を広げること、そして学びに必要なコミュニケーションとプレゼンテーションのスキルを高めることが本講義のねらいである。

教養卒論 (Liberal Arts Final Report)

0-2-0 3Q, 4Q

学部での教養教育の出口となる必修科目である。自身の「学びのストーリー」を描いてもらう。これまでに学んできた教養が、今後学んでいく専門科目や自身の将来ビジョンにとってどう生きてくるのか、社会にどう活かせるのか、A4用紙3枚程度にまとめる。小グループ単位で相互にレビューしながら、大学院学生の指導を受けながら執筆を進める。書いた文章を仲間に批判・添削してもらいながら仕上げることを通して、自分の考えを文章にまとめる楽しさ・苦しさを体験してもらいたい。

哲学A (Philosophy A)

國分 功一郎 教授 1-0-0 4Q

哲学を学ぶ上で大切なのは、ある哲学者が直面した具体的な問題、そして、その問題に答えるためにその哲学者が作り出した概念を実感することです。哲学者たちは一生懸命に自らの概念について説明しています。しかし、自分たちが答えようとしている問題については十分に語っているとは限りません。それは人が自分の行動の動機をうまく説明できないのと同じです。ですから、その問題を知り、実感しようと思ったら、私たち読み手自身がそれを解明しなければならないの

です。この講義では近代初頭の政治哲学を解説しながら、数人の哲学者についてそうした作業を行っていきます。取り上げるのは、ジャン・ボダン、トマス・ホッブズ、スピノザ、ジョン・ロック、ジャン＝ジャック・ルソー、デイヴィッド・ヒューム、イマニュエル・カントらの哲学者です。

講義のテーマとなるのは国家です。国家を妥当な仕方では定義するのはなかなか難しいことです。ただ、我々のよく知るタイプの国家、すなわち、近代国家を形作る概念を定義することはできます。この講義が特に注目するのは、「自然」「行政」「主権」の三つです。どれも皆さんがよく知る言葉だと思います。しかしそこには近代の政治哲学が積み重ねてきた様々な思考が見出されます。また、近代国家について考えることは、現在私たちがその中で生きている国家について考えることに他なりません。したがって、本講義を通じて、現在の政治経済を考えるために必要不可欠な知識を獲得することができます。同時に哲学についての一般的な知識も身につけることができます。

芸術 A (Art A)

伊藤 亜紗 准教授 1-0-0 3Q

本講義は、古代から 19 世紀までの西洋美術の大まかな流れを知るための導入的な科目です。パルテノン神殿、ゴシック建築、ミケランジェロ、レンブラント、マネなどの主要な作品を鑑賞しながら、西洋社会がどのような価値観を重視し、また芸術にどのような役割を期待してきたのかも考えます。教員による一方的な授業ではなく、グループワーク等学生のみなさんの積極的な参加によって授業を進めていきます。

本講義のねらいは、ふたつあります。ひとつは、西洋文化を理解する上で不可欠な基礎的教養を身につけること。もうひとつは、自分の感じたことや考えたことを説得的に伝えるコミュニケーション力も身につけることです。

文化人類学 A (Cultural Anthropology A)

上田 紀行 教授 1-0-0 2Q

文化人類学とは他文化のあり方を知りながら自文化を知る、他者を理解しながら自分自身の理解を深める学問である。本講義は文化人類学への入門であり、文化が異なるといかに私たちの考え方、世界観、行動様式が違ったものになるかを知り、自分自身のこれまでの生きてきた世界の見直しと、多様な世界への感性を養う。受講者どうしによるワーク、ディスカッションなども取り入れて、実際に他者を理解し、自分自身を深める機会を作りたい。

文学 A (Literature A)

磯崎 憲一郎 教授 1-0-0 4Q

本講義では、小説という表現形式の独自性・優位性を学ぶ。

小説は、「文字で書かれた伝達手段」でありながら新聞記事や評論とは違う、また、単なる物語（ストーリーテリング）でも、情報や教訓でもない。芸術としての小説の独自性を、音楽や映像といった他の芸術とも比較しながら、構造的に分析・検証する。

本講義のねらいは、じっさいに「小説（作品）を読む」前の準備として、学生が持っている「文学作品は難解なもの、高尚なもの」といった権威主義的な小説観を取り払い、「そもそも、小説とは何なのか？」を、自らの頭で考えさせる所にある。

歴史学 A (History A)

福留 真紀 准教授 1-0-0 3Q

この講義は、「歴史学」の入門編です。「歴史学」とはどのような学問なのか、多方面から考えます。

宗教学 A (Religion A)

弓山 達也 教授 1-0-0 4Q

本講義では宗教学の基本を学ぶ。特に現代社会における宗教の役割や機能に注目しつつ、宗教観、カルト問題、宗教と自分探しを扱う。

コミュニケーション論 A (Communication A)

中野 民夫 教授 1-0-0 2Q

「立志プロジェクト」の少人数グループワークの精神を受け継ぎ、人と人との生身のコミュニケーション能力の向上を目指す。人は社会的な生き物であり、人と人が一緒に考えたり、学んだり、創ったりすることは、私たちの根源的な欲びに通じる。今後あらゆるところで人とやりとりしながら生きていく上で、対人コミュニケーション力は不可欠である。本講義では、参加体験型のワークショップを通して、コミュニケーション力の向上を図る。

ねらいは、自己紹介、インタビュー、対話、プレゼンテーションなどの体験を通して、楽しみながらコミュニケーション上手になってもらうこと。

教養特論：多文化共生論 (Special Lecture :Social and Cultural Diversity)

佐藤 礼子 准教授 1-0-0 3Q

多文化化が進む日本の状況を知り、多様性のある社会とは何か、多様な人々が共生するにはどのようなことが求められるかを考える。文化・民族・宗教が混在する海外の事例も取り上げて考察する。講義では、異文化間コミュニケーションの概念と方法論を用いたグループワークやディスカッションを行い、異なる背景や文化をもつ人々対話するコミュニケーション能力を身につけることを目指す。

教養特論：言語と文化 (Special Lecture : Language and Culture)

° 赤間 啓之 准教授 平川 八尋 准教授 山元 啓史 教授 1-0-0 3Q

本講義は、言語学 A、言語学 B、言語学 C の導入科目として、学生が言語と言語学に関心をもつ機会を提供する。言語学の分野から三つ選び、それぞれの分野で興味深いトピックスを問題として取り上げ、学生の討論と実習によって講義をすすめる。統語論の回では、所有関係やアスペクトなどのカテゴリーについて議論する。音韻論の回では言語の音声と音韻をについて扱い、言語音はどのように記述されてきたのか、実際に発音することで理解する。意味論の回では、言語の恣意性や仮想動作など言語のデリケートな問題を取り上げる。

この講義の狙いは言語学に関する本質的な洞察力を身に付け、関連する言語学関係の授業科目履修の準備をし、学生がより体系的・網羅的な言語科学への第一歩を踏み出すことにある。

外国語への招待 1 (Introduction to Foreign Languages 1)

° 安徳 万貴子 准教授 戦 暁梅 准教授 三ツ堀 広一郎 准教授 山崎 太郎 教授

劉 岸偉 教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師

1-0-0 2Q

最初の二回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、三週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、歴史などの紹介も含め、各国語についてリレー形式で講義する。(各 Q で、独・仏・中・露のうち二か国語ずつについて講義。例えば第 2 Q でドイツ語・フランス語の場合は、第 3 Q で中国語・ロシア語。)

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

外国語への招待 2 (Introduction to Foreign Languages 2)

° 安徳 万貴子 准教授 戦 暁梅 准教授 三ツ堀 広一郎 准教授 劉 岸偉 教授
山崎 太郎 教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師 1-0-0 3Q

最初の二回はガイダンスとシンポジウムによる導入として、複数の担当教員が自らの体験に基づき、外国語を学ぶ意義と楽しさについて語り合い、三週目からはそれぞれの外国語を専門とする教員が、言語の背景となる文化、地理、社会、歴史などの紹介も含め、各国語についてリレー形式で講義する。(各 Q で、独・仏・中・露のうち二か国語ずつについて講義。例えば第 2 Q でドイツ語・フランス語の場合は、第 3 Q で中国語・ロシア語。)

本講義は翌年度、英語以外の新たな外国語学習を始める学生たちに、その前提となる考え方を紹介し、外国語を学ぶ面白さを伝えることを狙いとする。外国語を知ることは、自分の発想を変え、その言語を基底に成り立つ異文化に分け入っていく道のりでもある。本講義を通して、受講者は、どの言語も単なるコミュニケーションの道具ではなく、その言語圏の文化や歴史の結晶であり、それぞれの地域の人々の世界観を反映するものであると実感することになる。

教養特論：ライティングスキル (Special Lecture : Writing Skills)

° 山元 啓史 教授 平川 八尋 准教授 0-1-0 1Q, 2Q, 3Q, 4Q (2019 年度 2Q 開講。1Q, 3Q, 4Q 休講)

論文・レポートの形式、決まり事を学ぶだけでなく、どうすれば、論文・レポートができるのか、その執筆計画、日頃の考えの蓄積、積み上げ方、整理の仕方、まとめ方について、グループで話し合い、実際に自分で簡単な実験を行い、その内容をまとめる体験を行う。

表象文化論 A (Studies of Culture and Representation A)

北村 匡平 准教授 1-0-0 2Q

表象文化論とは、美術史や哲学、文学や人類学など個別の専門領域を横断しながら「表象」としての文化現象を捉え返す、脱領域的な学問である。本講義では、「見ること」に深く関わる近代以降の文化について、テーマごとに考えてみたい。具体的には、「崇高」という美学的カテゴリーから精神史としてのマニエリスム、東西の建築様式から造園術、博覧会からディズニーランド、身体 of 文化史からハリウッドのセレブリティ文化まで、幅広く議論していく。ただし、基礎的な設置科目であることを考慮し、なるべく平易な言葉で解説する。

授業では、さまざまなヴィジュアル・イメージを見ながら、人びとの創造的営みを通じて文化を考察していく。受講者には、分析対象となるイメージについて主体的に思考し、グループで意見を交わしてもらう。したがって、積極的な議論への参加が期待される。本授業の目標は、①表象文化論という学問を愉しむこと、②横断的に文化現象を捉える方法を身につけること、③現代の諸現象に対して歴史的な視点を持てるようになることである。

人間文化論 A (Human Studies A)

若松 英輔 教授 1-0-0 4Q

「人間」は、その個人だけでなく、さまざまな「他者」と関係においてはじめて「人間」たり得る存在である。

本講義は、「かかわりのなかの人間存在」を古今東西の詩歌を扉にして、人が自己と、他者、自然、あるいは超越的存

在と、どのような関係を切り結んできたかを考える。

この授業では、単に詩を読むだけでなく、「読む」とは何かを考える。

また、口語自由詩の創作も行い、「書く」とは何かを考える。可能であれば、クラスで共同の詩集を作成する。

「読む」「書く」「聞く」「話す」を総合的に感じ、考え、表現するところまでを実践する。随時、執筆、ディスカッション、プレゼンテーションも取り入れて行う。

法学（憲法）A（Law (Constitutional Law) A）

未定 1-0-0 3Q

【概要】

日本国憲法に関する基礎的な講義を行います。開講回数の関係上、対象分野は憲法総論及び人権が中心となります。憲法の基本原理である近代立憲主義の観点から憲法の意義や役割を確認するとともに、個別の規定の解釈論を検討します。

【ねらい】

講義や学修を通じて自分なりの憲法観を獲得し、社会に生起するさまざまな憲法上の問題を自ら考える上で拠り所となる視座をもつこと。身の周りに存在する人権問題への鋭敏な感覚とともに、政治や行政を監視し、主体的に政治プロセスに携わる市民としての能力や資質を涵養すること。

法学（民事法）A（Law (Civil Law) A）

金子 宏直 准教授 1-0-0 2Q

日常生活に係る法律の問題、契約、不法行為、消費者保護、裁判の仕組みなどを分かりやすく学ぶ。留学生と各国の法律事情について理解を深めるために英語の教材やディスカッション等も行う。（英語開講科目）

政治学A（Political Science A）

中島 岳志 教授 1-0-0 4Q

本講義は現代日本におけるナショナリズム問題について考察する。まずナショナリズム論の最前線の議論を講義し、その後、具体的な現象について映像・音楽・マンガなどを使用しながら解説する。ポイントは「不安型ナショナリズム」。社会が流動化し、安定的な社会基盤が失われる中、なぜナショナリズムが歪な形で勃興するのかを考える。さらに「不安型ナショナリズム」現象と連動するセカイ系アニメの分析などを通じて、現代の不安の性質を内在的に理解し、その政治的解決法を考察する。

本講義のねらいは3つある。一つはナショナリズムについての基礎知識を身につけること。二つ目はナショナリズム勃興の背景となる現代社会の特徴を把握すること。三つ目はその解決方法を政治学的に考えること。その過程で、受講生自身が「いかに生きるのか」という問いを深めることを期待する。

国際関係論A（International Relations A）

川名 晋史 准教授 1-0-0 2Q

なぜ、日本と米国は「同盟」関係にあるのか。なぜ、日本には米国の基地が存在するのか。そしてそれが沖縄に集中しているのはなぜか。本講義は、戦後日米関係のレンズをとおして様々な Whys を捉えていく。さらに、それらを今日の国際情勢（時事問題）と関連付けることで、国際政治と国内政治が抱える相克、日米の外交・安全保障政策の課題を浮かび上がらせる。

本講義のねらいは、受講者が国際関係論やグローバル・イシューに関心を持ち、それを主体的に学習するための問題意

識を涵養することにある。

心理学A (Psychology A)

永岑 光恵 准教授 1-0-0 3Q

本講義では、心理学入門として心理学の歴史から最近の研究成果にわたって概説する。特に、多岐にわたる分野の中から知覚、記憶、感情について取り上げる。併せて、心のメカニズムについての仮説を立て、実証していく心理学的な研究方法（実験や調査）についても講義する。

講義では、グループワークやグループディスカッションなども取り入れて、「人間とは何か」「人間の心とは何か」を考察し、人間理解を深めることを目的とする。

社会学A (Sociology A)

西田 亮介 准教授 1-0-0 2Q

社会学の基本的な考え方を理解し、その思考法をとおして、現代社会についての理解を深める。また、その背景としての社会学史について、理解する。

教養特論：現代社会の課題とコミュニケーション(Special Lecture : Social Issues and Communication)

久地楽 雅也 非常勤講師 1-0-0 3Q

【概要】 東工大出身で株式会社博報堂の現役社員による、リレー講座。人間の生活には、現代社会の様々な課題が潜んでいる。これを、仕組みやアイデア、コミュニケーションで解決している事例を取り上げ、その実践的な思考と発想を学ぶ。最終ゴールは、現代社会の課題解決を提案するレポート制作。

【自問自答の対話力】 各講師は、実践的なレクチャーを通じて、東工大生がもつべき知見や視点を提供。質疑応答やグループワークで学生を支援する。学生は、他問自答（正答のある「答案」）ではなく、自問自答（正答のない「提案」）で対話を高めていく経験を積む。

【課題解決の3つの力】 現代社会の課題解決に重要な3つの力、すなわち ①自問を立てる力 ②構想を描く力 ③自答で動かす力 を学ぶ。この3つの力は、大学生活を充実させ、社会人になってからも、自分で課題を探り、ビジョンを描き、実践へ踏み出す土壌になる。この「3つの力」と「対話力」で、授業と提案レポートに挑み、自分と人類の未来を切り開いてほしい。

（注） 株式会社博報堂は、創業1895年、国内第2位の大手広告会社。広告・マーケティングの領域で、企業や社会の課題解決を行っている。企業フィロソフィーは生活者発想。

経済学A (Economics A)

倪 彬 非常勤講師 1-0-0 4Q

この講義は予備知識の有無にかかわらず、経済学に関心のあるすべての学生を対象としている。講義ではミクロ経済学、マクロ経済学、そして計量経済学の初歩知識を扱う。ミクロ経済学は家計や企業など個々の主体を扱う分野であり、マクロ経済学はGDPや失業率といった国全体の経済現象を扱う学問である。また、計量経済学は経済理論から出発し、立てられた仮説の妥当性を実際のデータを用いて検証する学問である。いずれも具体例を用いて、より現実に近い観点から経

済学の基本を学んでいく。

学生たちは日常生活における様々なものごとに対して、経済学者の身になって、考えてもらえるように導くのが本講義の目標である。(英語開講科目)

教養特論：ファッション論 (Special Lecture: History of Fashion)

高村 是州 非常勤講師 1-0-0 4Q

現代社会において、衣服は単に身体を守る物ではなく様々な役割を担っている。

本講義ではファッションがどのようにして生まれ、社会の中で発展し、これからどのように変わっていくのかを学び、「ファッション」という概念について一緒に考える。衣食住という言葉があるように、「衣」は人間の生活において根幹に関わる部分でありながら、自己の全身を自ら見ることができないため、客観性を欠きやすい分野である。しかし、自分を視覚的にプレゼンテーションしていくことは社会生活を送る上で重要であり、その一助としてのファッションの活用方法についても考えていく。

教養特論：東南アジア (Special Lecture: Southeast Asia)

堀場 明子 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講義は、日本との関係が深い東南アジア諸国についての理解を促すものである。東南アジア地域の人々と社会、政治、文化について、さまざまな角度から概観する。植民地支配の歴史、国民国家の形成、開発独裁体制、環境問題など実社会における問題と密接にかかわるテーマを取り上げる。

本講義のねらいは、グローバル社会で生きる上で必須となっている異文化理解の促進と、違いを受け入れる寛容の精神の醸成である。東南アジアを知ることを通して、多様な生き方、考え方を知り、他者との協働につなげてほしい。

(英語開講科目)

メディア論 A (Media Studies A)

柳瀬 博一 教授 1-0-0 4Q

本講義では、「メディア」の意味と意義について学ぶ。

通常、「メディア」というと、テレビ、新聞、雑誌、ラジオ、映画、書籍、広告など「メディアビジネス」を連想する向きが多い。けれども、今や、インターネットの発達、SNS やブログなど個人メディアサービスの浸透、パソコンやスマートフォンの普及で、あらゆる個人と組織がいつでもどこでも情報発信できる「だれでもメディア」時代が訪れている。この「だれでもメディア時代」を支えるのは IT や AI などの「理系の技術」である。

理系の技術が牽引する「だれでもメディア」時代。この時代における、メディアの意味は、意義は、何か？ 自らがメディアとなった個人は、組織はどう振る舞うべきか。具体的な事例をとりあげながら、考察する。

統計学 A (Statistics A)

毛塚 和宏 講師 1-0-0 2Q

近年、ビッグデータの隆盛とともに統計学が注目されつつある。なぜなら、ビッグデータを含む、人や社会を対象にしたデータを取り扱うには、統計学の知識や素養が必要であるからである。

本講義は、社会科学における統計学の応用を取り上げながら、統計学の基本的な概念（記述統計、相関、回帰、検定・推定など）を解説する。本講義を通じて、履修者は統計学の基本的な概念を身に付け、それら駆使して社会問題にアタックする能力を養うことができる。

科学史 A (History of Science A)

多久和 理実 講師 1-0-0 4Q

本講義は、科学史を現代の科学を取り巻く状況を相対化する視点として提供する。

科学知識を学び研究する上で、科学活動をよく知る必要がある。現在当然のように受け入れられている科学活動（科学者という職業が存在すること、理論と実験が両輪となって進歩すること、学会で成果を発表すること、など）は昔から当たり前だったのだろうか？そうでなければ、どのように生じてどのように当たり前になったのだろうか？現在価値が置かれているものを相対化することで、変わり続ける「科学」という分野で活動し続けていくための視点を育む。

技術史 A (History of Technology A)

中島 秀人 教授 1-0-0 4Q

この授業では、科学技術と社会の間に起こる諸問題を議論する。そして科学技術を将来専門とする立場からこのような問題にどのように取り組むべきかを論じる。

科学技術社会論・科学技術政策 A (Science and Technology for Society A)

調 麻佐志 教授 1-0-0 2Q

科学や科学的事実とはどのようなものと考えられるのか。その「事実」の形成に研究者や論文がどう作用しているのか。翻って、「事実の形成」という観点から、研究者にはどのような行動が求められるか。そのような問題に関する入門的な内容について講義する。

本講義のねらいは、

- (1) メタな視点から科学を見る
- (2) 研究の内容だけでなく研究者の役割や責任について基本的自覚を持たせる
- (3) 科学技術社会論への関心を高める

の3つである。

科学技術倫理 A (Ethics in Engineering A)

大来 雄二 非常勤講師 1-0-0 3Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。学生として「よく生きること」についても考察する。

科学哲学 A (Philosophy of Science A)

田子山 和歌子 非常勤講師 1-0-0 4Q

本講義は、17, 18 世紀ヨーロッパにおいて発展した自然科学の方法論を、科学思想史（キリスト教思想史、哲学史も含む）のコンテクストから扱う。

本講義は、1. 「自然法則」、「実験と経験」、「経験主義」、「時間・空間」、「進歩」など、近代自然科学の方法論ないし基礎テーマを、各授業でテーマごとに扱い、かつ、2. それらのテーマに通底する、科学と宗教の関係をめぐる文化的・歴史的基盤を概観することをねらいとする。

社会モデリング A (Social Modeling A)

岩井 淳 非常勤講師 1-0-0 3Q

本講義では、社会的な意思決定過程をモデルするための基礎技法を提示する。主要な論点として、社会的選択理論の構成概念について講義する。社会的選択理論は、個人の選好を集散的決定に結びつける方法を分析する理論的な枠組みであり、コンドルセの投票のパラドクスやアローの不可能性定理に関連している。本講義の内容は、意思決定における情報基盤の問題にも関連する。本講義のねらいは、社会的意思決定に関する概念的理解を得る機会と、この領域における独立した研究的関心を育むような機会を、受講生に提供することである。

意思決定論 A (Decision Making A)

猪原 健弘 教授 1-0-0 2Q

意思決定論における重要な意思決定問題を取り上げ、解決策、解決策の利点や欠点、そこから得られる示唆を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて検討する。

意思決定論が扱う意思決定問題の代表例と解決策、および、意思決定論の基本概念と基礎的な知見を理解・修得させると同時に、意思決定論への興味を喚起することが本講義のねらいである。

言語学 A (Linguistics A)

平川 八尋 准教授 山元 啓史 教授 1-0-0 4Q

言語学の入口として、私たちが日々触れている言語の具体的現象を取り上げて、そこにはどんな言語の不思議が詰まっているのか、身近な経験を言語の科学として楽しむ授業を行う。予備知識は不要。必要なのは言語に向き合う素直な態度と食欲な好奇心だ

学びのデザイン (Learning Design)

室田 真男 教授 田中 岳 教授 森 秀樹 准教授 大浦 弘 准教授 1-0-0 2Q

大学入学前までの学びと、大学での学びは何がどう異なるのだろうか。大学で学ぶことの意味や、大学生の目指すものは何か。この講座では、大学生の学びを学習科学・教育工学・認知心理学の諸理論を用いて理論的に考える力を養うことを目的に講義する。大学生活4年間だけでなく、社会人として、「学ぶ」方法や、「教える」方法についても触れながら、自らの今後の学習についてデザインできる能力を養う。

Special Lecture: Technology and art (教養特論：技術と美術の哲学)

BEKTAS YAKUP 助教 1-0-0 4Q

技術とは何か？美術とは何か？これらは、互いに概念的、歴史的にどう関係しているのか？美術と工芸(技術)が同じであった時代があったのか？このコースは、ハイデッカー(1889-1976)の哲学、特に彼の2つのエッセー “The Question Concerning Technology” (1954)と “The Origin of the Work of Art” (1960)を通してこれらの疑問と概念を探究する。ハイデッカーの近代的技術の概念について議論する

それは、伝統的な古い技術を、攻撃的で制御しにくく、拡張したものであり、deinon と Sublime の概念と関連している。

技術は、人類の自由の表現であり、また同時に脅威であるのか？ 我々は、技術なしに世界を体験できるか？美術なら、技術とは異なる、世界を自由に体験する方式を提供できるのか？ ハイデッカーがしたように、ゴッホの「靴」を鑑賞し、技術と美術について考える。（英語開講科目）

Special Lecture: Thinking and learning through museums

（教養特論：ミュージアムから学ぶ科学・技術・文化コミュニケーション）

BEKTAS YAKUP 助教 1-0-0 2Q

博物館は、世界の文化遺産を保存し解説する場です。現代では、その数も容量も以前より増えています。多様な形で発展し、常に好奇心と学びの中心としての位置を保っています。この新しいコースは、その主題と源泉を探り、体験して直接考え学びたいと考えています。博物館がどんなディスプレイをするか、芸術・科学・技術をどう語るかだけでなく、来館者が対象の展示物や芸術からどう学ぶかについて探究したいと考えています。様々な規模の博物館や美術館を見て、幅広い芸術・工芸・標本を評価をし、授業で議論し、短いレポートを書きます。（英語開講科目）

哲学B（Philosophy B）

國分 功一郎 教授 2-0-0 1Q

誰かに謝る時、あなたは能動的でしょうか？ それとも受動的でしょうか？ 能動的だという人がいるかもしれません。ですが、謝る時に重要なのは、過ちへの気づきや自らの行いへの悔いといったものが、自分の心の中に現れてくることです。これは人が能動的に、やろうと思って出来ることではありません。では謝罪は受動的なのかというと、そうとも思えません。誰かに謝る時、人は謝罪という出来事を単に受動的に経験しているわけではないからです。我々はあまりにも能動／受動の区別に慣れ親しんでしまっているため、それを必然的で、普遍的で、不可欠なものと考えています。ところがよくよくこの区別を眺めてみるならば、それはむしろごちなく、「不自然」なもの、少なくとも我々の周囲で起こっていることを記述するにはあまりに不十分なものであることが分かってきます。この講義は能動／受動の対立を疑問視することを出発点としつつ、古代の言語の中にあった、「中動態 middle voice」という文法カテゴリーを様々な観点から検討していきます。ベースとなるのは哲学ですが、その他、言語、歴史、政治、医療、倫理など様々な分野が取り上げられます。

私たちが現在、どのような言語を用いて思考しているのかを反省的に考察し、その言語と結びついた諸概念および諸問題を自覚することが本講義の狙いです。具体的には、私たちが頻繁に用いる概念、「意志」「責任」「行為」「選択」「権力」等々が論じられます。自分たちが用いている言語について考察することは、自分たちの思考の様式そのものを考察することに他なりません。そしてこの作業はどんな分野の学問を学ぶにあたっても必要とされることです。

芸術B（Arts B, Esthetics B）

中尾 拓哉 非常勤講師 2-0-0 2Q

本講義は、20 世紀美術を中心にした作品を鑑賞しながら、美術について広く考えることをねらいとしています。美術作品には、作家の考えだけではなく、時代背景や脈々と続く美術史の大きな流れが渦巻いています。しかし同時に、作品は鑑賞者一人ひとりが対峙することで、初めて存在意義をもつものでもあります。本講義では、みなさんで意見を交わしながら、そうした鑑賞体験を共有していきます。

作品を「見る」ということは、それを「作る」ということへの共感を示すことにもつながっています。パブロ・ピカソのキュビズム、現代美術の父とされるマルセル・デュシャンのレディメイドなど、20 世紀を代表する未だ謎めく作品群を、美術を考える上で必要なキーワードとともに追っていきます。美術作品を鑑賞し解釈する体験は、みなさんの思考

や論理性に対して大きな刺激を与えるものとなるはずです。

文化人類学B (Cultural Anthropology B)

未定 2-0-0 4Q

文化人類学は、世界各地における現地調査を実施し、暮らし方の細部から社会の成り立ちまで様々なレベルのデータを収集しながら、人間の文化・社会生活の多様性や複雑性を明らかにしてきた。我々はこの学問を通して、世界の多様な文化や価値観にふれ、自身がこれまで当たり前としてきた事柄を一度見直し、新たな人間観や世界観を得ることができる。本講義では、講師自身のインドネシアでの調査経験も紹介しながら、「家族」「ジェンダー」「国家」「観光」「人とモノの関わり」等のトピックをとりあげ、関連する文化人類学の主要な議論を検討する。この講義のねらいは、①文化人類学の特徴を理解すること②受講者自身が会える様々な文化的事象に対し、文化人類学的な視点で考えられるようになることである。

文学B (Literature B)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 3Q

本講義では、古典から近代小説、日本の現代小説まで、個々の作品を「読む」事を通じて、「小説とは何か？」を学ぶ。小説の起源まで遡り、古典から近代小説、現代小説まで見渡した上で、個々の作品の特徴を捉え、「小説という表現形式でなければ出来ない事を始めたのは、いつの時代の、どの作家からだったのか？」を具体的に考察し、「小説とは何か？」、実作者でもある担当教員の考え方を示して行く。文学史的位置付けや、マッピングといった客観的分析ではなく、小説本体に寄り添い、「この作品を書いている最中に、作者は何を企み、どんな頂きを目指していたのか？」を考えながら、より能動的に、個々の小説を読み込んで行く。

歴史学B (History B)

福留 真紀 准教授 2-0-0 3Q

この講義では、「人」から歴史学を考えます。歴史を紡ぎだしているのは「人」です。美術史・考古学・文学・思想史の視点にも触れながら、「人」にこだわって、分析していきます。

宗教学B (Religion B)

弓山 達也 教授 2-0-0 2Q

本講義では1980年代後半のバブル期から東日本大震災(2011年)までに見られる日本のスピリチュアル文化を理解することを目的とする。特にスピリチュアリティと社会との関係に重きを置き、スピリチュアルブームとその背景、若者の死生観、大衆文化に見られるスピリチュアリティを扱う。

コミュニケーション論B (Communication B)

中野 民夫 教授 2-0-0 3Q

本講義は、簡単な正解のない様々な課題に対して、多様な人々が「協働」で取り組むことが求められる時代に、人と人が対面して話し合うコミュニケーション力を高める。自ら良き話し手、聴き手になるだけでなく、人々が集い話し合う場を適切に創り、円滑に進行していく「ファシリテーション」の基本技を身につける。

ねらいは、今後のチームでの研究活動など、様々な人が協働する場に活かせる生身のコミュニケーション力を、楽しいワークショップ体験を通じて向上させること。

国際文化論：アジア・アフリカ (Intercultural Studies: Asia and Africa)

°三ツ堀 広一郎 准教授 藤田 梨那 非常勤講師 崔 盛旭 非常勤講師
鈴木 真弥 非常勤講師 工藤 裕子 非常勤講師 小澤 一郎 非常勤講師
辻上 奈美江 非常勤講師 戸田 美佳子 非常勤講師 2-0-0 1Q

グローバル化の時代にあって忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的には中国、韓国、インド、インドネシア、イラン、サウジアラビア、中部アフリカの7カ国（7地域）に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、歴史、伝統、社会などを概観する。各地域の専門研究に従事する7人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの7地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

国際文化論：ヨーロッパ・ラテンアメリカ (Intercultural Studies: Europe and Latin America)

°三ツ堀 広一郎 准教授 小笠原 能仁 非常勤講師 梶田 裕 非常勤講師
河村 英和 非常勤講師 土田 久美子 非常勤講師 宮崎 淳史 非常勤講師
伏見 岳志 非常勤講師 エウニッセ・スエナガ 非常勤講師 2-0-0 2Q

グローバル化の時代にあって忘れられがちな国際社会の諸相に案内する。具体的にはドイツ、フランス、イタリア、ロシア、チェコ、メキシコ、ブラジルの7カ国に焦点をあわせながら、各国文化の民族性、伝統、歴史、社会などを概観する。各地域の専門研究に従事する7人の講師が、それぞれ独自の切り口から、オムニバス形式でこの7地域をあつかう。

本講義のねらいは、異文化理解の促進と国際意識の醸成である。一連の講義を通じて得た知識は、履修者が将来、多様な文化的出自の持ち主たちが集まるグローバルな環境で生きることになったときに、かならずや力になるだろう。

世界文学 1 (World Literature 1)

°三ツ堀 広一郎 准教授 劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授 山崎 太郎 教授
安德 万貴子 准教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師 2-0-0 3Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、中国の文学作品をオムニバス形式の授業で鑑賞する。

世界文学を読むことによって、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、更に文学を通じた異文化理解の仕方を獲得することができる。

世界文学 2 (World Literature 2)

°三ツ堀 広一郎 准教授 劉 岸偉 教授 戦 暁梅 准教授 山崎 太郎 教授
安德 万貴子 准教授 河村 彩 助教 JEAN FRANCOISE MARIE 外国人教師 2-0-0 4Q

この講義で、学生は世界文学の主要な作品を鑑賞する。講義はまず「世界文学とは何か」を皮切りに、ドイツ、フランス、ロシア、中国の文学作品をオムニバス形式の講義で鑑賞する。

世界文学を読むことによって、学生は世界文学の読み方を学び、各国民・民族の思考法や心性を理解し、さらに文学を通じた異文化理解の仕方を獲得することができる。

教養特論：オペラへの招待 (Special Lecture: Introduction to Opera)

山崎 太郎 教授 2-0-0 1Q

オペラは歌とオーケストラ、舞台美術と衣装、言葉と演技といったさまざまな要素が一体となって、愛と死をめぐる人々

の情念と社会の複雑な様相を描き出す総合芸術である。視覚と聴覚の相乗効果には何ものにも代えがたい魅力があり、それゆえに 16 世紀末の誕生以来、貴族社会から市民社会へのヨーロッパの歴史の変遷において、娯楽と教養の対象として発展を続け、現在、世界的な舞台芸術としての地位を確立するにいたっている。本講義では代表的な作品をいくつか紹介。各作品をさまざまな角度から掘り下げ、その魅力に親しむことで、現代の私たちにとってオペラが持つ意味を考え、ひいてはヨーロッパの社会と文化の成り立ちをより深く理解するための一助とする。

オペラといえば欧米で主に富裕層のために上演される豪華な芸術であり、日本に住む学生にはあまり縁がないと一般的に思われているが、今日の日本でもさまざまな上演が行なわれ、時には学生のための特別な価格設定がなされていたりする。またオペラは何よりも テレビドラマや映画と同様、人間たちの織り成す関係や喜怒哀楽の感情を描くドラマであり、演出によってはそれが(オリジナルのト書きとは違う)現代の舞台装置や衣装という設定で示されたりもして、きわめて身近なものと感じられることもある。授業を通じて、このようなオペラの多様な在り方を紹介し、ヨーロッパの伝統文化への理解を深めるとともに、現代の私たちが生きる社会におけるオペラの意義を考えてゆきたい。

教養特論：日本文化入門 (Special Lecture: Fundamentals of Japanese Culture) (2019 年度は休講)

未定 2-0-0 3Q

表象文化論 B (Studies of Culture and Representation B)

北村 匡平 准教授 2-0-0 3Q

20 世紀において娯楽として絶大な影響力をもった映画は、「映画スター」という特殊な表象を生み出した。スクリーンで輝きを放っていた「映画スター」はやがて、戦前・戦中期／占領期において、国民を主体的に軍国主義／戦後民主主義に包摂するための文化装置として利用され、人びとの振る舞いや思考を規定する決定的な役割を担った。また映画が斜陽化する一方で、高度経済成長期に家庭へと浸透していったテレビは、(映画スターとは異なる仕方でも)アイドル／アーティストを生み出した。そのような日常生活に深く根差したメディアで構築される有名性も、現代の文化産業においては不可欠な存在である。

本講義では、メディアに媒介されることによって、名声を獲得してきた女性(スター女優、女性アイドル／アーティスト)に焦点化し、その表象の歴史を概観する。到達目標は、①「スター」を歴史的に捉えながら 20 世紀の映像史を理解すること、②同時代の社会・文化における集合的欲望の様態からジェンダー規範の変遷を理解すること、③映画、雑誌、テレビ、パソコン、モバイルなどで構築される有名性や私たちが生きるメディア文化を理解することである。

人間文化論 B (Human Studies B)

若松 英輔 教授 2-0-0 3Q

人間文化は、さまざまなもの、出来事によって構成されている。この講義は、それを実存的に——単に知性だけでなく、経験的にとらえることを目的にしている。

テキストとして、池田晶子『14 歳からの哲学』(トランスビュー)を読み解きながら、池田の考えた問題を個々が、自己の問題として捉え直し、語り合い、書く実践を深めていく。

随時、執筆、ディスカッション、プレゼンテーションも取り入れて行う。

教養特論：アートとデザイン (Special Lecture: Art and Design)

田中 みゆき 非常勤講師 1-0-0 4Q

アートとデザインは、本来まったく異なる役割を持ちながらも、見た目には違いが明らかでないことも多いためか、しばしば混同されがちな概念である。とりわけ、メディアやビジネス、そしてアーティストやデザイナーのあり方の多様化に伴い、さらに境界が曖昧になっていると言えるだろう。

しかし、アートとデザインを区別し見分けることができるようになることがこの講義の目的ではない。そうではなく、それぞれ異なった意図のもとに生み出され、社会に受容されてきたさまざまなアートやデザインの事例を通して、境界を曖昧にしている要因とそれぞれの役割を考察したいと思う。また、あらゆる表現に欠かせないものとなったテクノロジーについても取り上げたい。それらの事例に触れることで、表現する／伝えるという行為、ひいては生き方の多様性について考え、実践する機会になればと思う。(英語開講科目)

法学（憲法）B（Law（Constitutional Law）B）

松村 芳明 非常勤講師 2-0-0 2Q

憲法（学）に関する最重要の知識事項の解説を行う講義である。具体的には、立憲主義や憲法改正、平和主義、権力分立等の、専門的には「憲法総論（統治機構含む）」と呼ばれる領域についてとり上げた後、人権の概念や人権保障の基本的なあり方等の「人権総論」領域についてとり上げ、最後に「人権各論」領域に移ることになる。

本講義の狙いは、憲法の最重要の事項について、受講者が、原理や意義の把握を伴った十分な理解に達し、また、見解が分かれる論点について、多角的で厚みを持った考察ができるようになることが目指される。さらに、各知識事項や論点を、事例とともに学ぶことにより、現実社会と憲法知識との関連を踏まえた考察ができるような講義としたい。

なお、本講義は教職等で必要になる「憲法」科目に対応するものである。

法学（民事法）B（Law（Civil Law）B）

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

民法や民事裁判手続法を含めた、民事法について基本的な学習を行う。法律を学習するのに必要となる六法の使い方も身につけることで、将来、自分の仕事に関連する法律の理解にも役立てることができる。

政治学B（Political Science B）

中島 岳志 教授 2-0-0 2Q

政治学の基礎について、現代思想の成果を取り入れ、論じる。理論的側面を講義した上で、具体的な現代社会の課題について論じる。政治学とは、異なった能力・価値観・意見・慣習をもった他者同士が、ひとつの場所でいっしょにやっていくための方法を考える学問である。重要なのは自分とは異なる他者の存在を前提とすること。他者とわかりあうことは、そう簡単なことではない。時にもどかし、時にイライラする。しかし、何とか合意形成しなければ、社会の秩序を保つことはできない。では、どうすればいいのか。その試行錯誤の軌跡と思考を講義し、現代社会への展望を論じる。

本講義のねらいは2つある。一つは政治学の基礎を習得すること。二つは現代社会の課題に対して、政治学的解決の方法を身につけること。この能力を身につけることで、異なる他者との共存のあり方を模索することが可能となる。

国際関係論B（International Relations B）

川名 晋史 准教授 2-0-0 1Q

今日、全ての国家は主権の上では平等ということになっているが、歴史的にみれば、そのような世界秩序のあり方は普遍的ではない。そこで本講義では、われわれが今日考えるような「国際関係」がいつどのような形で始まり、どのような推移を経て今に至っているのかを考えていく。とりわけ、戦後冷戦の中心舞台であったヨーロッパにおいて、米ソの勢力

争いは何をめぐってどのように行われたのか。またその冷戦に大国がどのように関わり、それをどのように克服しようと試みたのか。こうした観点から、米ソの大国間政治の相互作用の過程を分析する。

本講義のねらいは、「現在」を普遍のものだと考える固定的な視座を打ち砕くことにある。

心理学B (Psychology B)

永岑 光恵 准教授 2-0-0 2Q

本講義では、心理学の多岐にわたる分野の中から主に知覚、記憶、学習、感情、性格、社会行動について取り上げる。教員による一方向的な授業ではなく、グループワークやグループディスカッションを講義内で多く取り入れ、他者とのコミュニケーションを通じて、「人間とは何か」「人間の心とは何か」を考察し、人間理解を深めることを目的とする。また、関心をもった分野毎にグループを形成し、グループワークに取り組み、その成果を全受講生の前でプレゼンテーションする機会もあり、各自の関心分野をより深く掘り下げることも可能である。

社会学B (Sociology B)

野田 潤 非常勤講師 2-0-0 4Q

我々がふだん「当たり前」「常識」と思っていることの中には、思いがけない「非・当たり前」「非・常識」が潜んでいる。社会学は、身の回りの事象をより広い社会の文脈に置くことで、ものの見方を増やしてくれる学問である。講義では、以下の2点に重点を置きつつ、社会的に考えるための物の見方とその方法を養っていく。

(1) 社会学における基本的な概念や理論、方法を習得する

(2) 身の回りの様々なトピックに関して具体的なデータや事例を取り入れながら、社会的な視点を学ぶ

教養特論：現代社会論 (Special Lecture: Contemporary Society)

池上 彰 特命教授 2-0-0 1Q

憲法や安保、日米関係、メディアリテラシー、イスラムやアメリカ大統領選挙、北朝鮮など現代に生きる学生たちに、社会に出てから必要とされる現代社会の認識力を身につけてもらうことを一義的な目標とする。

経済学B (Economics B)

庫川 幸秀 非常勤講師 2-0-0 3Q

ミクロ経済学では、個々の経済主体がどのような動機や誘因（インセンティブ）で行動するか、その行動の積み上げの結果、社会全体でどのような状態が実現するか、を考える。この講義ではミクロ経済学の基礎的な理論、および現実の問題の理解や政策効果の分析にどのように応用できるか、について解説する。様々な経済分析の基礎となるミクロ経済学の基礎的な理論を習得すること、身に着けた知識を応用して現実に行き起きている問題に対して考察できるようになることが、本講義のねらいである。

教養特論：国際社会とコミュニケーション (Special Lecture: International society and Communication)

パトリック ハーラン 非常勤講師 2-0-0 3Q

国際化が急ペースで進む中、日本はある意味、もう島国ではないといえよう。国民も一つの国に所属して活動する“日本人”というよりも、世界を視野にいれ、グローバルで活躍する“国際人”にならないといけない時代だ。本講義は国際関係理論の基本を学んだ上、世界の現状を見て日本や日本人の可能性と役割を検証する。温暖化、移民や難民、テロ、情報社会、集団的自衛権、領土、捕鯨、TPP などなど、話題沸騰中の課題を取り上げながら理論を応用する。

レクチャーの他、ディスカッションやプレゼンを通して学生同士が刺激しあう場を提供する。世界と接するときの心構えやコミュニケーション術も学習し、セオリーや基本知識をもって世界を相手に議論できる、21 世紀型の人材育成を目指す。

メディア論 B (Media Studies B)

柳瀬 博一 教授 2-0-0 3Q

本講義は、現代メディアの基礎知識を学んだ上で、科学技術に対するメディアとジャーナリズムの報道の意義について考察する。

21 世紀は科学技術が主役となりやすい時代である。地球環境、医療、経済、社会や政治やエンタテインメントにいたるまで、科学技術に関わらない分野はほとんどない。

科学技術そのものや科学技術がもたらした事象はメディアの取材対象になる。さらに、科学技術に関わる者はメディアを介して一般に向けた発言や説明を積極的に求められる。

ゆえに、科学技術の道を歩む者は、研究畑で仕事をするにせよ、産業界に身を投じるにせよ、メディアビジネスの一員となるにせよ、科学技術をメディアはどう封じるべきか、という命題に向き合うときがいずれ訪れる。

本講義では、現代メディアの基礎を学んだのち、現実にかきた科学や技術にまつわる事故や事件などの報道を取り上げて、科学や技術とメディアとの関わりについて考察する。また、科学技術の当事者が情報発信を行う、「科学技術ジャーナリズム」の基礎についても学ぶ。講義には、実際に科学技術報道に従事する現役メディア関係者やジャーナリストを招く予定である。

統計学 B (Statistics B)

毛塚 和宏 講師 2-0-0 2Q

推測統計学とは、得られたサンプルから母集団の特徴を捉えようとする領域である。社会調査データやビッグデータを適切に扱うためには、必要不可欠である。本講義では、社会科学のトピックを題材として、推測統計学を学ぶ。特に、社会的な不平等に焦点を当てる。

科学史 B (History of Science B)

多久和 理実 講師 2-0-0 3Q

本講義は、特に科学者の業績と人生に注目しながら科学の歴史をたどる。

具体的には、ある歴史上の科学者にスポットライトを当て、時代背景を解説した上で映像作品を鑑賞し、本人が残した著作の日本語訳を読む。ガリレオ・ガリレイの『天文対話』(1632 年)、アイザック・ニュートンの『自然哲学の数学的諸原理』(1687 年)など、その時代の自然観を変えた名著を実際に読みながら、科学者の業績や人生が社会の中でどのように受け取られているのかを考える。

技術史 B (History of Technology B)

中島 秀人 教授 2-0-0 4Q

この授業では、19 世紀後半以降科学と技術がどのように融合して科学技術となったかを議論し、科学技術とは何かを明らかにする。また、20 世紀の産業社会がどのように歴史的に形成されたかを知ること、21 世紀の科学技術のあるべき姿を考える基礎を得る。

教養特論：大学史 (Special Lecture: History of Universities)

亀井 宏行 教授 広瀬 茂久 特命教授 山口 雅浩 教授 山崎 鯛介 准教授

多久和 理実 講師 岡田 大士 非常勤講師 田口 陽子 非常勤講師 2-0-0 1Q

私たちの学ぶ東工大とは、どのような大学か考えるための科目である。130 年を超える東工大の歴史をつくった人々とその成果にかんする講義を聴き、キャンパスの関係の地を探访しその産み出したモノに触れ、その歴史を学び、その未来について考える。東工大の歴史を通じて、科学・技術の専門家をめざす東工大生が、日本の科学・技術の未来について、それぞれに考える。

科学技術社会論・科学技術政策 B (Science and Technology for Society B)

調 麻佐志 教授 2-0-0 1Q

科学者の社会的責任とは何だろうか。今後の科学技術のガバナンスはどうあるべきか。専門家と市民の科学コミュニケーションはどうあるべきか。さまざまな事例をもとに考えるのが本講義である。将来の自らの研究成果の社会への影響に関心のある理系の学生、そして自然科学の個別の学問領域を越えて、外交や国際関係、法律そして社会制度の関係する複合領域の問題（科学技術のガバナンス）に関心のある文系の学生、双方に開かれている。

本講義のねらいは、

- (1) 自らの研究成果が社会へ与える影響に関心を持つ人材を育成する
- (2) 外交や国際関係、法律、そして社会制度などが関係するような複合領域の問題に対するアウェアネスを高めることである。

科学技術倫理 B (Ethics in Engineering B)

札野 順 教授 2-0-0 2Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを 具体的な事例をとおして検討する。

科学哲学 B (Philosophy of Science B)

東 克明 非常勤講師 2-0-0 3Q

前提が正しいとき必ず結論も正しい推論を、演繹的推論という。演繹的推論は 20 世紀に数学的に形式化され、大いに進歩した。今日、形式化された演繹的推論を扱う学問は論理学と呼ばれる。本講義では論理学の入門的内容を扱う。前半では命題論理、後半では述語論理について、それぞれの形式言語、日本語文の形式化、推論規則と演繹、そして完全性や健全性といったメタ論理について学習する。

論理学は、現在ではコンピュータの正確な理解にとって不可欠である。また、そのような実践的側面に加え、論理は人間の合理性、科学の合理性にとって不可欠の要素である。本講義では論理のエッセンスを学び、論理に関わる哲学的問題について、技術的内容を伴った理解ができるようになることを目指す。

意思決定論B (Decision Making B)

猪原 健弘 教授 2-0-0 1Q

競争的意思決定状況を数理的に扱うための理論である非協力ゲーム理論の基礎と、そこから派生したさまざまな理論を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。

非協力ゲーム理論の基礎的枠組みとしての「標準形ゲーム」、「展開形ゲーム」、「繰り返しゲーム」、そして、非協力ゲーム理論から派生した理論である「メタ ゲーム理論」、「コンフリクト解析」、「ハイパーゲーム理論」、「ソフトゲーム理論」についてのさまざまな概念の数理的な定義と分析方法を与えることで、各枠組みや理論の特徴を理解させることが本講義のねらいである。

社会モデリングB (Social Modeling B)

岩井 淳 非常勤講師 2-0-0 4Q

本講義では、社会的意思決定過程のモデルに関する基本理論を提示する。主要な論点として、社会的選択理論の重要定理について講義する。本講義の内容は、民主主義、意思決定支援、厚生主義、帰結主義に関する議論を含む。講義では様々な投票手法の紹介も行う。そのいくつかは高度情報時代において魅力的である。

本講義のねらいは、社会的意思決定に関する主要な理論を学ぶ機会と、この領域における独立した研究的関心を育むような機会を、受講生に提供することである。

言語学B (Linguistics B)

平川 八尋 准教授 山元 啓史 教授 1-1-0 2Q

言語に向き合う経験を積んだら、次は、ことばを分析してみよう。どうしてことばの使い方にはルールがあるのか、ルール（文法）を（意識的には）知らなくても話ができるのはなぜか、ルールを知っていても外国語になると母語のように話せないのはなぜか、文法、語彙、意味、それぞれには、まだまだ知らないルールがたっぷり含まれている。それをみんなでディスカッションしながら、見つけてみよう。きっと誰かに話してみたくなるだろう。

教養特論：身体教養科学 (Special Lecture: Physical Activity)

林 直亨 教授 福岡 俊彦 教授 丸山 剛生 准教授 小谷 泰則 助教 2-0-0 2Q

身体や身体活動は我々の日常生活を支える重要なものである。本講義では、身体に関わる様々な現象・事象を紹介し、それらの意義や、背後にある生理的・工学的・心理的・社会的なメカニズムについて考えてみる。

身体や様々な活動に人知の及ばない素晴らしさがあることを確認し、それらの意義を考え、メカニズムを紐解く一助としたい。

教養特論：科学とヒューマニズム (Special Lecture: Science, Literature, and Humanism)

BEKTAS YAKUP 助教 2-0-0 2Q

科学とヒューマニズム：宮沢賢治のヒューマニティと幸福について

このクラスは、日本の有名な作家で詩人である宮沢賢治(1896-1933)の技術と文学、ヒューマニズムに焦点を当てる。短い生涯で賢治は、百あまりの短編、多くの哲学的な詩を創作した。最もよく知られた『銀河鉄道の夜』(1933)に始まりあまり知られていない物語の中でも、無私の心および苦痛と貧困の救済、感謝を強く描いている。「真の幸福」—幸福を得るために他者を助ける一方法は、賢治の作品とその生涯で見られるもっとも重要な考えである。賢治にとって、無私の心で他者を助けることは、本質的であり、人間であるための手段であった。それは我々を、他の動物とは異なる人間にする

ための手段だった。彼の最もよく読まれている詩「雨ニモマケズ」は、このヒューマニズムのあり方を美しく表現している。

賢治の考える理想的な科学と技術は、賢治のこの見解の一部である。彼の描く技術者と科学者は、独学の博愛主義者であり、他者を助ける深い道徳的義務を感じている。『グスコブドリの伝記』（1932）で、賢治は未来の故郷イーハトーブをイメージしている。そこでは、火山の噴火、地震、干ばつ、気候変動、そして飢饉などの自然災害の脅威を根絶するために、科学と技術が利用される。主人公のブドリは、独学の勤勉な技術者である。他者の幸福のために無私の精神で働き、それにより「真の幸福」に到達する。純粋な博愛主義者としてのブドリを、賢治は支持する。ブドリは、噴火による破壊からイーハトーブを救うために、進んで命を犠牲にしたのである。

各時間、「農民芸術」から菜食主義にわたる賢治の考え方のそれぞれの側面について議論する。また、彼の道徳的な視点から、仏教の立場、特に日蓮宗を検討する。一方、賢治の思想、文学、執筆に影響を及ぼした作家—ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリス、エマーソン、トルストイ、ルイス・キャロル—についても考察する。

目的:

文学がどうヒューマニズムを育てることができるか、科学と技術と工学にどう社会的道徳的使命を与えることができるか、について示す。賢治の、深く道徳的で人道的な物語と思考を通して、若い科学者、技術者に刺激を与え、勉学の目的と意味を探る手助けをする。美しい散文のスタイルと感情表現を、学生たちに紹介する。（英語開講科目）

教養特論: 生物学史 (Special Lecture: History of biology)

矢島 道子 非常勤講師 2-0-0 1Q

この授業では古代から現代に至る生物学や地質学の歴史を通して概観してゆく。古代から現代に至る科学の歴史をたどってゆくと、16, 17 世紀からだんだんと近代化され、現代化されていくのを理解する。特に生物の進化をどのように考えていたかについて力点を置く。さらに、それぞれの時代で科学が社会の中でどんな位置にあったかも理解する。また、女性が科学の中でどんな位置にあったかということも考えていきたい。こうした試みをつうじて、科学の時間軸（歴史性）と空間軸（社会性）を形成し、科学の「いま」への理解を深めていく。

哲学C (Philosophy C)

國分 功一郎 教授 2-0-0 3Q

哲学研究の基礎は読むことです。書かれたテキストを読み、それが扱っている題材だけでなく、その背後にある概念の網の目までつかみ取らなければなりません。そのためには、普段なら見落としてしまうような、ちょっとした言葉遣いにも気を遣う必要があります。この講義では、ドイツに生まれ、アメリカで活躍した哲学者ハンナ・アレントのテキストを読みながら、それを実践していきます。扱うのは彼女の論文集『過去と未来の間』（みすず書房）に収められた「自由とは何か?」という論文です。この論文でアレントは自由がいつも「意識の自由」と同一視されてしまうことを批判しつつ、独自の自由論を展開しています。アレント哲学への入門として最適な文章です。論文のコピーを配布し、一言一句を読み、解説していきます。

論文は古代から現代にまで至る長い期間を扱っているので、幅広い知識を身につけることができます。哲学者は彼(女)が実際に書いたこと以上のことを考えている——これを実際に読みながら体験してもらいたいと思います。そうした体験は様々な場面に応用できるはずです。

芸術C (Arts C, Esthetics C)

砂連尾 理 非常勤講師 2-0-0 2Q

本講義は、ボディーワークとしてのヨガ、気功、合気道、ダンスなどのワークを行いながら自己の身体と向き合い、身体感覚を広げていくことが自身の思考、発想とどのように繋がるかを考察し、身体と思考の往復を繰り返しながら身体がもつ可能性について考えます。

また、最先端のテクノロジーを用いた身体ワークショップ、舞台表現の映像鑑賞を行いながら、主にそこで用いられているタスクやインタラクティブな装置について議論し、最終的には作品、或いはワークショップを制作ないし立案して頂きます。

文化人類学C (Cultural Anthropology C)

上田 紀行 教授 2-0-0 2Q

「苦悩と解放の人類学」-人間は誰もが幸せになりたいと望んで生きている。しかし私たちは多くの苦悩に直面しながら生きる存在でもある。

人間にとっての苦悩とはいかなるものか、文化が違えば苦悩の形も違うものなのか、それとも人類に共通の苦悩の形があるのか。日本社会に特有の苦悩はいかなるものなのか。そうした人間にとっての苦しみを前半では扱う。

後半ではその苦悩からの解放を論じる。私が長年論じてきた、人間にとっての「癒し」とは何か。宗教は人間の解放を導くのか。祭や儀式などのパフォーマンスの開く世界はいかなるものか。人間はなぜアートを必要とするのか。

様々な文化における苦悩の形、そしてそこからの解放の形を知ることは、人生にとって有益な体験となることだろう。また講義形式だけではなく、参加型のワーク、ディスカッション等も頻繁に行われるので、活発な参加が期待されている。

文学C (Literature C)

磯崎 憲一郎 教授 2-0-0 2Q

本講義では、学生が短編小説を執筆し、授業内で発表・批評し合う。

初回・第2回の授業で担当教員自身の小説観や執筆法、過去に発表した作品について説明した上で、第3回目以降は学生自らが執筆した短編小説を授業内で発表・批評し合う。議論の中で、「創作の楽しさ・難しさ」を共有すると同時に、「小説に内在する力」や「小説を生成する原理」、更には芸術作品を生み出すために必要な「創造的思考」「オリジナリティー」についても考える。

歴史学C (History C)

福留 真紀 准教授 2-0-0 4Q

この講義のテーマは、日本の対外関係史です。取り扱う時代は中近世です。
このころの日本の外交のかたちについて、考えてみたいと思います。

宗教学C (Religion C)

弓山 達也 教授 2-0-0 1Q

本講義では日本人の死生観を理解することを目的とする。そのため世界的に有名な日本映画を取り上げ、小レポートや議論によって、その映画に見られる死生観を見極めていく。扱う映画は滝田洋二郎監督「おくりびと」、加藤久仁生監督「つみきのいえ」(2008年)、小津安二郎監督「東京物語」(1953年)、北野武監督「HANA-BI」(1998年)である。

教養特論：日本思想史 (Special Lecture: Intellectual History in Japan)

畑中 健二 助教 2-0-0 1Q

過去から現在の、日本に展開した思想について論ずる（「そもそも『日本』とは、『思想（史）』とは何か？」も議論の対象に含まれる）。講義全体の視点となるテーマを一つ定め、それに沿って歴史上のいくつかのトピックに焦点をあてる。「日本思想史」という領域には、多くの文化研究や地域研究と同様に、「これを学べばこと足りる」というような特定のディシプリンは存在せず、代わりに個々の主体的取り組みとその対話があるといってもよい。そこでは、したがって、当たり前のこととしての領域横断的な学修と、互いの研究を理解・批判するコミュニケーション能力が求められることになる。

こうした特性をリベラルアーツの一環としての本講義にも活かし、日本の思想・歴史に関する理解の深化を通して、既存の枠組みに囚われすぎないような、広く応用可能な思考力を身につけることをねらいとする。

教養特論：ジェンダー (Special Lecture: Gender)

野田 潤 非常勤講師 2-0-0 3Q

性別とは、最も「自然」「常識」と思われがちなテーマのひとつである。本講義では、性別に関する私たちの「当たり前」が、いかに当たり前ではなく「不思議なこと」なのかについて、身近なトピックを用いながら考えてゆく。講義ではジェンダーにまつわる基本的な概念や理論を習得し、現代日本社会の性別に関する諸問題を学んでゆく。その際には量的データ・質的データの双方を用いつつ、歴史社会学や比較社会学の視点も取り入れてゆく。最終的には性別に関するさまざまな社会問題を論じつつ、そうした諸問題に対応するための知識や思考、物の見方を養っていく。

受講者には本講義を通じて、(1)性別そのものがいかに社会的に規定されているか、(2)性別に関する身の回りのさまざまな問題がいかに社会的な問題とつながっているのかを理解してもらいたい。同時にこれらのプロセスを通じて、(3)「社会」に対する感受性を深めてもらうことも期待する。

教養特論：音楽 (Special Lecture: Music) (2019年度は休講)

未定 2-0-0 1Q

教養特論：オンライン学習コース概論 (Special Lecture: Introduction to edX online course creation)

CROSS JEFFREY SCOTT 教授 1-0-0 1Q

(英語開講科目)

教養特論：オンライン学習コース制作実習 (Special Lecture: Introduction to online course video creation)

CROSS JEFFREY SCOTT 教授 0-1-0 2Q

(英語開講科目)

教養特論：都市の表象 (Special Lecture: Urban Space in Literature and Cinema)

木内 久美子 准教授 1-0-0 3Q

近代化の発展とともに、世界は急激な都市化を遂げてきた。この過程で人々の「日常生活」（ルフェーブル）のあり方や、人々が都市に対してもつイメージはどのように変化してきたのか。都市生活や都市空間を描出した文学作品や芸術作品をとおして、これらの点を明らかにしつつ、都市化に伴う今日の社会問題についても、授業内のディスカッションを通して議論する。（英語開講科目）

教養特論：都市 (Special Lecture: Urban Space for the Future)

木内 久美子 准教授 2-0-0 4Q

未来都市像はどうあるべきか、また科学者はその実現のために何ができるのか。毎週のリーディング・ディスカッション課題をとおして、参加学生がそれぞれの専門領域についての知識を共有しながら、未来都市像をつくりあげていく。授業はワークショップ形式で行われる。(英語開講科目)

表象文化論 C (Studies of Culture and Representation C)

北村 匡平 准教授 2-0-0 2Q

私たちの日常生活はかつてないほど「映像」に取り囲まれている。映画やテレビだけではなく、ワンセグや PC、モバイルや電子広告など「スクリーン」は日常に遍在し、私たちはなかば無意識に映像が作り出す〈意味〉を受け取っている。だが、常に身近にある「映像」は、その親しみやすさゆえに、いかに私たちの情動に作用しているのかを思考する態度を希薄化させている。

本講義では、映画を中心とした視聴覚メディアの独特な表現形式を理解したうえで、なぜその表現が人びとを魅了するのかを探究していく。そのために映像を演出、撮影、編集、音響／視覚効果、演技などの構成要素に分解し、多角的に表現技法を捉える。取りあげる映像は、ハリウッド映画や日本映画、ヨーロッパの映画が中心となるが、アニメーション映画やドラマの表現も適宜、参照する。この授業では、①20 世紀の映像表現の多様性を理解すること、②映像作品を批評する力を養うことを目標としている。一方的な講義ではなく、映像表現を思考する時間を設けるので、積極的な参加が求められる。

人間文化論 C (Human Studies C)

若松 英輔 教授 2-0-0 2Q

この講義では、人間にとってもっとも根源的な問題である「生と死」あるいは「生きがい」「いのち」とは何かをめぐって考察を深める。哲学者、芸術家、詩人、さらには医師たちの言葉にふれながら、科学が捉える生命現象には収まりきらない、多くのひとびとが「生きがい」「いのち」と呼んできたものをめぐって考察するところからはじめ、それを他者と分かち合い、未知なる者たちに語りかけ得る文章を書けるようになるまでたどり着くことを目的としている。

本講義では情報としての知識の習得の優先順位は高くない。参加者の主体的な問題追究の態度が求められる。

随時、執筆、ディスカッション、プレゼンテーションも取り入れて行う。

法学（憲法）C (Law (Constitutional Law)C)

辻 健太 非常勤講師 上田 宏和 非常勤講師 2-0-0 3Q

この講義では、まず、憲法の背景にある立憲主義の理念とその歴史について解説する。そのうえで憲法における重要な人権や統治の基本的な仕組みにおいて、立憲主義の理念がどのように活かされているのかを説明する。

憲法の基本原理をおおむね理解した上で、身の周りで生じるさまざまな憲法問題を自分自身で考える力を涵養することをねらいとする。

法学（民事法）C (Law (Civil Procedure Law) C)

金子 宏直 准教授 2-0-0 4Q

民事裁判の手続法として、民事訴訟法、民事執行法等を学習する。弁理士試験科目などの民事訴訟法に該当する。

本科目の目的は、社会の中で必ず発生する紛争を、裁判によりどのように解決することができるのかを、民事訴訟法を

学習することにより理解することにある。民事裁判制度がどのような仕組みで、どのような法理論により組み立てられているのかを理論的に学習することができる。民事紛争解決には裁判だけではなく代替的紛争解決手続の学習、民法で学習した権利義務が裁判ではどのように取り扱われるかを学習することができる。

法学（民事法・知財）C（Law (Intellectual Property Law) C）

金子 宏直 准教授 田川 陽一 准教授 太田 昌隆 講師 安形 雄三 非常勤講師

菅野 智子 非常勤講師 井口 加奈子 非常勤講師 岡本 守弘 非常勤講師

小川 憲久 非常勤講師 相山 敬士 非常勤講師 小倉 秀夫 非常勤講師 2-0-0 3Q

東京工業大学で知的財産法を体系的に学習することができる唯一の科目である。東工大 0B や知的財産実務で活躍する弁護士等の専門家も加わり、基礎的な内容から実践的な内容へのつながりを、民法の財産法から各知的財産権法まで順次学習していく。担当予定（金子宏直、田川陽一、太田昌孝、安形雄三、菅野智子、井口加奈子、岡本守弘、小川憲久、相山敬士、小倉秀夫 その他）。平成 27 年度までの総合科目「先端科学技術と知的財産権」の後継科目である。複合領域コース「科学技術と知的財産権コース」科目である。

研究者、エンジニアを将来のキャリアに予定している学生の方も多いと思われるが、研究や製品開発を行うには多額の資金が必要になる。こうした資金を獲得するために重要な役割を果たすのが知的財産権（特許等）である。発明等により知的財産を作り出すだけでは、資金につなげることができない。特許権などの知的財産権を取得し、それを有効に利用することが必要になる。この知的財産権の取得、利用活用に携わる主な専門職が、弁理士である。東工大の卒業生には多くの弁理士が活躍している。弁理士数（出身校別平成 24 年統計）によると東京工業大学 47 名（全 837 名中）5.8%にも及ぶ。科学技術と知的財産権の関係について理解を深め、科学者、技術者として必要な知識を深めるとともに、弁理士などをを目指す学生にも有益な学習の機会を提供することが狙いである。

政治学 C（Political Science C）

中島 岳志 教授 2-0-0 1Q

近代日本の政治・外交とナショナリズムの関係について講義する。特に精神史の観点を導入し、日本が積極的に全体主義へと傾斜して行った過程を論じる。明治国家は「一君万民」をテーゼとし、王政復古による封建制打を目指したが、誕生した政府は一部の藩出身者が行政を独占する藩閥政治だった。この体制に対する「第二の維新」を目指す武装闘争・言論闘争が、超国家主義の源流を生み出す。さらに明治後期に入ると、富国強兵・殖産興業といった国家目標に自己同一化できない悩めるエリート青年（煩悶青年）が登場し、精神史上、新しい時代を迎える。そして、彼らの中から昭和維新テロ・クーデターを主導する超国家主義者が誕生する。本講義では文学作品や社会現象も分析の対象とすることで、「八紘一宇」というヴィジョンに人々が魅かれて行ったプロセスを論じる。このプロセスを辿ることは、現代日本を相対化することに通じる。講義では、現代社会への視座を意識し、歴史の中から問題の本質を抽出する方法を論じる。

本講義のねらいは 3 つある。一つ目は、近代日本政治が歩んだ道筋を的確に把握すること。二つ目は日本が全体主義へと傾斜して行ったプロセスを説明できるようになること。三つ目は、超国家主義者となっていった人物の内在的批評を通じて、現代社会と共通する不安の問題を考察すること。この能力を身につけることによって、現代日本の政治を論じる視座を獲得する。

国際関係論 C（International Relations C）

川名 晋史 准教授 2-0-0 1Q

本講義では、国際関係を捉える基本的な理論枠組であるリアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムについて考察していく。そしてそれらを第二次世界大戦後の具体的な事象の説明に適用し、理論の射程と限界を明らかにすること

で、国際関係の構造と多元性を炙り出そうとする。

そのねらいは、第一に、複雑な国際関係を理解するための相対的な視点を養うことにあり、第二には、理論と実際の反復作業をつうじて、応用範囲の広い問題解決型の思考を形成することにある。

心理学C (Psychology C)

永岑 光恵 准教授 2-0-0 4Q

本講義では、ストレス科学を主に心理生理学的側面から取り上げる。避けたい、減らしたいと考える「ストレス」について、ストレス科学の歴史から振り返り、最新のストレス研究成果を紹介する。また、体験的にいくつかのストレス軽減方法も講義内で行う。

講義を通して、ストレスやストレス管理に関する新たな考え方を獲得し、日常生活に活かせるようにすることを目的とする。

社会学C (Sociology C)

西田 亮介 准教授 2-0-0 1Q

本科目は、日本社会の民主主義とその啓蒙プロセス、それらの課題と展望を検討する。とくに、投票年齢の引き下げと市民性教育を取り扱う。

さらに日本社会が民主主義や政治に向き合った/向き合わざるをえなかった時代の知見を、現代の、そして今後の日本の民主主義の維持、発展にどのように活用するかという問いを検討する。

経済学C (Economics C)

未定 2-0-0 3Q

本講義では基本的な動学的マクロ経済モデル、特に世代重複モデルを解説する。

ほとんどの国で世代間所得移転政策が実施されている。例えば、賦課方式の年金制度では若年世代から老年世代への所得再分配が行われることになる。これらの政策は世代間での利害対立を引き起こし、また経済活動に対して重大な影響を及ぼしている。本講義では、経済政策の厳密な分析手法の修得を目標として授業を進める。

教養特論：メディア心理学 (Special Lecture: Media Psychology)

岩男 征樹 助教 2-0-0 3Q

本講義は、メディア心理学の入門編である。メディア心理学とは、日常生活の中で我々がメディアを用いていかにやり取りしているかを質的方法により明らかにする領域である。心理学では1990年代より質的方法を用いた研究が増えてきた。質的方法とは研究者が自ら現場に向かい、コミュニティに参加してやり取りし、体験を通じて実践の特徴を明らかにする方法である。それらの研究はワークプレイスの研究として始まったが、2000年代になってより身近なファンコミュニティの研究も始まった。

本講義では事例として仕事場、アニメヲタク、アイドルヲタクなどを取り上げ、ディスカッションを通じて、メディア使用やコミュニティの特徴について考察を深めていく。

それらの検討を通じて、メディア心理学の基本的な考え方について理解を深めると同時に、他者と関わりながら学術的知見や経験、理論を踏まえて、自分なりの意見や解決法を導き出す力を身につけていく。

メディア論 C (Media Studies C)

柳瀬 博一 教授 2-0-0 2Q

本講義では、現代メディアの基礎教養を学んだ上で、「理系の仕事」としてのメディアビジネスについて考察する。

一般にメディアビジネスは、放送番組の制作、新聞記事の取材執筆、書籍の編集、小説の執筆といったメディアコンテンツを作ること、文系や芸術系の仕事、と認識されやすい。けれども、こうしたコンテンツを支えるメディアそのものは基本的に理系の仕事で成り立っている。出版は印刷技術が支えており、放送は通信技術の賜物である。テレビの基礎技術を世界最初に開発したのは、東工大の前身である東京高等工業学校の卒業生である高柳健次郎氏であり、ゲームで知られる任天堂の中興の祖、岩田聡元社長も東工大 OB のプログラマーである。

メディアコンテンツがデジタル化し、メディアの主戦場がインターネットに移ったいま、メディアビジネスは、基礎技術からコンテンツの制作にいたるまで、理系が主役となりつつある。

本講義では、メディアの基礎教養を学んだのちに、現在のメディアビジネスの最新事例をとりあげ、未来のメディアに理系の仕事はどう役立てるかを考察する。メディアビジネスの経営や制作にかかわる当事者をゲストに招く予定である。

統計学 C (Statistics C)

毛塚 和宏 講師 2-0-0 4Q

社会学や政治学の分野でもちいられる計量分析の基礎を学ぶ。統計学的思考の特質、記述統計・仮説検定・相関・様々な回帰分析（線型、ロジット、その他）の理論を学ぶと同時に、統計ソフト「R」を用いた分析手法を修得する。そのねらいは、社会・政治現象に関わるマクロデータ・ミクロデータから重要な情報を引出し、因果的推論に基づく研究手法を身に付けることにある。

科学史 C (History of Science C)

多久和 理実 講師 2-0-0 2Q

本講義は、特に実験・観測機器に注目しながら科学の歴史をたどる。

具体的には、ある機器の発展にスポットライトを当て、それぞれの段階で実現した実験・観測精度およびそれに伴う発見について解説していく。また、アリストテレスの経験に基づく演繹法や、フランシス・ベーコンの実験に基づく帰納法、そして実験主義のアカデミーの形成を学ぶことで、なぜ実験・観測を行うのか、なぜ実験・観測の結果を信頼して受け入れることができるのかを考える。

技術史 C (History of Technology C)

中島 秀人 教授 2-0-0 2Q

この授業では、科学技術史の事例、あるいは科学技術と社会の間に起こっている問題の事例を取り上げ、グループに分かれて調査し、発表討議を行う。

科学技術社会論・科学技術政策 C (Science and Technology for Society C)

調 麻佐志 教授 2-0-0 2Q

科学技術社会論の問題にクリティカルシンキングを適用して考える訓練を行う。そのために多面的な理解が求められる複雑なトピックを取り上げ、一回はそのトピックに関する概略を講義し、もう一回は学生間のディスカッションに当てて授業を進める。

本講義の狙いは、

- (1) 科学に対して批判的な見方を論理的に表現すること
 - (2) クリティカルシンキングの技法を使うことを
- を経験し、学ぶことである。

科学技術倫理 C (Ethics in Engineering C)

札幌 順 教授 2-0-0 1Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やってはならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけではなく、自らの「よく生きること (well-being)」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを具体的な事例をとおして検討する。責任ある研究・開発活動も、本科目の重要な要素である。

上記の目的に加え、本科目では、科学技術倫理に関連する事例を自ら調査・分析し、その結果を報告する能力の育成も目指す。

科学哲学 C (Philosophy of Science C)

小山田 圭一 非常勤講師 2-0-0 1Q

科学についての哲学的問題には様々なものがある。科学の目的とは何か、科学の対象とは何か、科学の方法とは何か、科学的知識とは何か、科学とは何か、などの一般的な問題がある一方、物理学や化学、生物学などの個別科学においても哲学的に考察すべき問題が多々ある。本講義では、そうした様々な問題のいくつかについて、その背景とそれに対する既存の見解を紹介し、それらをできるかぎり理論的・体系的に考察する。その上で、最善の解答あるいはこれまでもより良い解答があるかを探りたい。

科学に携わる者が、何を対象に、どんな方法で、そしてまた何を目的として科学的な実践を行うのか、そうしたことについて素朴に考えるだけでなく、より厳密かつ整合的な考察が可能になるよう、観点、問題、材料を提供し、それらを基に科学についてより深く考察するための普遍的な素養を身に付けることを目的とする。

意思決定論 C (Decision Making C)

猪原 健弘 教授 2-0-0 2Q

集団意思決定状況を数理的に扱うための会議の理論の基礎概念を、ディスカッション、グループワーク、講義、演習を通じて取り扱う。具体的には、「シンプル ゲーム」、「会議」、「提携の強さ」、「会議のコア」、「整合的な提携」、「意思決定主体の許容範囲」、「許容ゲーム」、「提携の望ましさ」、「安定な提携と安定な代替案」、「仮想許容範囲」、「後悔のない代替案」、「会議のコアの特徴づけ」を検討する。

会議の理論の基礎概念を理解し、それを他者に伝える能力を涵養することが本講義のねらいである。

社会モデリング C (Social Modeling C)

大堀 耕太郎 非常勤講師 穴井 宏和 非常勤講師 2-0-0 1Q

本講義では、複雑な社会課題を理解し、解決するための方法論について解説する。具体的には、ゲーム理論、メカニズムデザイン、複雑ネットワーク分析、マルチエージェントシミュレーションなどの人間の心理や行動を扱う理論と方法、さらには社会課題の解決に有用な人工知能 (AI) 技術について解説する。

社会システムのモデリングから施策や制度の設計および評価、という社会システムデザインに関する一連のプロセスに

ついて理解することが本講義のねらいである。

言語学C (Linguistics C)

° 赤間 啓之 准教授 山元 啓史 教授 1-1-0 1Q

言語学Cでは脳神経言語学を中心に、関連する認知言語学、統計言語学(自然言語処理)まで概観する。脳の構造・機能を通じて言語を捉えようとする科学の歴史から説き起こし、先人達がどのような測定方法で言語機能の神経基盤を解明してきたか、特に機能的磁気共鳴画像法(fMRI)に重点を置きつつ紹介する。現代言語学の重要なテーマである、言語習得、多言語併用、言語障害(失語症)、意味処理、記憶・知覚・運動・情動などについては、基本から最近の研究動向まで紹介する。また脳神経言語学の研究に必須な計算プログラミングについて、導入的な解説を行う。更には担当者が管理運営を行っている生命理工学院・機能的磁気共鳴画像法(fMRI)施設を利用し、脳神経言語学の実験とデータ解析に必要な実験計画法、統計解析など様々な手法について導入的な授業を行う。

学生は言語と脳についての科学に触れることで、人間に関する教養と研究の基本的スキルを身につけることで、この研究分野の楽しさ、難しさに気づくことができる。人間理解が深まることで、高度な情報社会、科学技術社会で生きてゆく際に自分にとっての羅針盤を作る上で一助となりうる。

教養特論：スポーツ科学 (Special Lecture: Sports Science)

° 林 直亨 教授 丸山 剛生 准教授 2-0-0 1Q

スポーツの競技力向上には、様々な科学・技術が貢献している。ここでは、運動生理学と、バイオメカニクスとに関連する事象を取り上げ、それらの科学の基礎的な概念との関連を扱う。すなわち、身体が出力するエネルギー量を抑制するために、効率よく運動する手法を発見するバイオメカニクスと、身体が出力できるエネルギー量を増加させるために、発揮できる力・持久力を向上させる運動生理学とが、どのように競技力向上と関連したのかについて考えていく。

教養特論：人間関係論 (Special Lecture: Human Relations)

° 齋藤 憲司 教授 安宅 勝弘 教授 2-0-0 3Q

本講義では、現代社会における人間関係の諸相や社会と人間において生じる様々な課題に、臨床心理学および精神医学的観点からアプローチする。人間科学、精神科学に独自の方法論とその思想、理念を論じるとともに、対象となる人間の多様性を紹介する。各種資料を用いながら、人間のあり様および関係性について検討し、出席者とともに考察を進めていくことで、科学的・客観的な思考に加えて、個別性や主観性をも尊重しうる態度を構築していくことをめざす。具体的には、青年期にある自身を振り返り、どのような人間関係の中で育ち、支えられ、時に葛藤してきたかを臨床心理学の見地から検討・考察するとともに、現代社会の大きな関心事である「こころの健康」について、精神医学の立場から多角的に考えていく。

本講義のねらいは、ひとつには、よりよい理工人としてのあり方と対人ネットワークづくりについて実習を通じて修得していくことであり、もうひとつには、人間関係、すなわち他者や社会との関わりという観点についての洞察を深めていくことである。

教養特論：環境 (Special Lecture: Environment) (2019年度は休講)

未定 2-0-0 4Q

地球環境問題をはじめ現代社会には深刻な課題が山積みだが、これらの諸問題に向き合い、各人なりに少しでも良い方向へと動いていく力は、どのように得られるのだろうか。「誰かにやってほしい」という受動的な希望ではなく、自ら創りたい未来を描

き参画していく積極的な希望,「アクティブ・ホープ」を育みたい。アメリカから世界に広がったジョアンナ・メイシーらの「つながりを取り戻すワーク」を学び,転換期を生きる拠り所,「深いやすらぎ・大きな勇気」を探る。

ねらいは,環境など世界の諸課題に対して,きちんと現実を見つめ,どんな時にも希望を失わずに前向きに動け,人生と社会を豊かにする力を身につけること。

人文学系ゼミ（自分発見,社会・文化・人間探求セッション）導入 1

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity)Introduction1)

上田 紀行 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（自分発見,社会・文化・人間探求セッション）導入 2

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity)Introduction2)

上田 紀行 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり）導入 1

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss)Introduction 1)

中野 民夫 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり）導入 2

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss)Introduction2)

中野 民夫 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン）導入 1 (Seminar on Humanities(Art workshop)Introduction 1)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 1Q, 2Q (2019 年度は休講)

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン）導入 2 (Seminar on Humanities(Art workshop)Introduction 2)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論）導入 1

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society)Introduction 1)

弓山 達也 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論）導入 2

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society)Introduction 2)

弓山 達也 教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学）導入 1 (Seminar on Humanities(Museum and History)Introduction 1)

福留 真紀 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学）導入 2 (Seminar on Humanities(Museum and History)Introduction 2)

福留 真紀 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

人文学系ゼミ（哲学）導入 1 (Seminar on Humanities(Philosophy)Introduction 1)

國分 功一郎 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（哲学）導入 2 (Seminar on Humanities(Philosophy)Introduction 2)

國分 功一郎 教授 0-2-0 3Q. 4Q

哲学の古典を読みながら、哲学書を読み、考え、その概念を身につけるとはどういうことなのかを学んでいきます。前提知識は必要ありません。取り上げる本は参加者と相談して決めますが、一つの候補としてヘーゲル『精神現象学』（ちくま学芸文庫）を考えています。

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar)Introduction 1)

金子 宏直 准教授 0-2-0 1Q. 2Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar)Introduction 2)

金子 宏直 准教授 0-2-0 3Q. 4Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance)Introduction 1)

西田 亮介 准教授 0-2-0 1Q. 2Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance)Introduction 2)

西田 亮介 准教授 0-2-0 3Q. 4Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）導入 1

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa)Introduction 1)

川名 晋史 准教授 0-2-0 1Q. 2Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄）導入 2

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa)Introduction 2)

川名 晋史 准教授 0-2-0 3Q. 4Q

社会科学系ゼミ（心理学）導入 1

(Seminar on Social Sciences(Psychology)Introduction 1)

永岑光恵 准教授 0-2-0 1Q. 2Q

社会科学系ゼミ（心理学）導入 2

(Seminar on Social Sciences(Psychology)Introduction 2)

永岑光恵 准教授 0-2-0 3Q. 4Q

融合系ゼミ（意思決定論）導入 1

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Decision Making)Introduction1)

猪原 健弘 教授 0-2-0 1Q. 2Q

融合系ゼミ（意思決定論）導入 2

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Decision Making)Introduction2)

猪原 健弘 教授 0-2-0 3Q. 4Q

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育）導入 1

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education)Introduction1)

札幌 順 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育）導入 2

(Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education)Introduction2)

札幌 順 教授 0-2-0 3Q, 4Q

融合系ゼミ(社会科学への量的アプローチ入門)導入 1

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Introduction to Quantitative Approach to Social Science)Introduction1)

毛塚 和宏 講師 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ(社会科学への量的アプローチ入門)導入2

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Introduction to Quantitative Approach to Social Science)Introduction2)

毛塚 和宏 講師 0-2-0 3Q, 4Q

本ゼミでは、文献を輪読し、社会科学の量的アプローチを学ぶ。受講者は、担当箇所に対してレジュメを作成し、他の受講者がわかるようにプレゼンテーションを行う。

人文学系ゼミ（自分発見，社会・文化・人間探求セッション） 1， 3， 5

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity) 1, 3, 5)

上田 紀行 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（自分発見，社会・文化・人間探求セッション） 2， 4， 6

(Seminar on Humanities(Culture, Society and Humanity) 2, 4, 6)

上田 紀行 教授 0-2-0 3Q, 4Q

各自が自分自身の問題意識に基づくテーマで2～30分くらいの発表を行い、それについてゼミ生全員でディスカッションを行います。テーマは、社会、文化、人間に関することならば何でも。これまでも、格差問題、国際援助、政治のあり方といった社会的なテーマから、恋愛、映画、サークル内の人間関係といった身近なテーマまで、様々なテーマが深く語り合われてきました。

学期中に数コマを続けての集中ゼミを数回、そして前期は夏休み中、後期は春休み中に一泊二日のゼミ合宿を行います。

自分の発表を準備し、発表することで、また他の人の発表を聞くことで、プレゼンテーション能力が格段に向上します。また多様なテーマの発表に触れることで、世界が広がり、様々な分野へのアクセスが可能になります。自分とは異なる思考法、感性を持った人たちと深く語り合うことで、自己探求が進み、また深い議論ができる仲間を作ることができます。

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 1， 3， 5

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss) 1, 3, 5)

中野 民夫 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（参加と協働と至福の場づくり） 2， 4， 6

(Seminar on Humanities(Facilitating dialogue, collaboration, and bliss) 2, 4, 6)

中野 民夫 教授 0-2-0 3Q, 4Q

この世に生まれた一人の人間としての幅広い成長を目指し、「参加と協働と至福の場づくり」をテーマに、学び合いの

コミュニティを育みたい。

具体的に体験を通して学びたいことは二つ。ひとつは、ワークショップや創造的な対話をファシリテート（促進）する参加型の場づくりの技法。それぞれの思いや知恵を引き出し、相互作用の中で大きな学びや創造へと展開するファシリテーターのスキルとところを、身につけていく。もうひとつは、ホリスティックな人間力。身体を調え、呼吸を調え、心を調え、今ここに集中できるマインドフルネスを養う。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 1, 3, 5 (Seminar on Humanities(Art workshop) 1, 3, 5)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 1Q, 2Q (2019 年度は休講)

この講義では、芸術祭等へのフィールドワークを行います。大学の教室での学びを離れ、自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。本年度は、夏休みに2泊3日で、瀬戸内国際芸術祭に行きます。

人文学系ゼミ（創造と思考のレッスン） 2, 4, 6 (Seminar on Humanities(Art workshop) 2, 4, 6)

伊藤 亜紗 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

この講義では、冬休み中の5日間の集中講義で行い、毎日異なる課題（例：キャンパス内に異空間を作れ）に対して作品の制作を行い、その後でじっくり講評を行います。自分の体と心を動かしながら、発想の引き出しをふやすことをめざします。

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 1, 3, 5

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society) 1, 3, 5)

弓山 達也 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（現代宗教／スピリチュアリティ論） 2, 4, 6

(Seminar on Humanities(Religion and Spirituality in Contemporary Society) 2, 4, 6)

弓山 達也 教授 0-2-0 3Q, 4Q

このゼミでは宗教学の基本的な考え方を学びつつ、特に新宗教、カルト、宗教と暴力、スピリチュアリティの問題を取り上げて、理解を深めていくことを目的とする。そのためゼミでは現代宗教に関するテキストを読み、議論を行い、現地研究を実施する。

人文学系ゼミ（博物館と歴史学） 1, 3, 5 (Seminar on Humanities(Museum and History) 1, 3, 5)

福留 真紀 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（博物館と歴史学） 2, 4, 6 (Seminar on Humanities(Museum and History) 2, 4, 6)

福留 真紀 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

本物に触れ、現場に立つ、をモットーに、歴史学と向き合います。自ら前近代の日本にアクセスできるように、古文書読解能力を身に付けるため、ゼミでは史料の輪読にも取り組みます。また、博物館での授業を複数回行う予定です。

人文学系ゼミ（哲学） 1, 3, 5 (Seminar on Humanities(Philosophy) 1, 3, 5)

國分 功一郎 教授 0-2-0 1Q, 2Q

人文学系ゼミ（哲学） 2, 4, 6 (Seminar on Humanities(Philosophy) 2, 4, 6)

國分 功一郎 教授 0-2-0 3Q, 4Q

哲学の古典を読みながら、哲学書を読み、考え、その概念を身につけるとはということなのかを学んでいきます。

前提知識は必要ありません。取り上げる本は参加者と相談して決めますが、一つの候補としてヘーゲル『精神現象学』（ちくま学芸文庫）を考えています。

社会科学系ゼミ（法学ゼミ） 1, 3, 5 (Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar) 1, 3, 5)

金子 宏直 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（法学ゼミ） 2, 4, 6 (Seminar on Social Sciences(Japanese Law Study Seminar) 2, 4, 6)

金子 宏直 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

文系ゼミ（法学等）の後継。法律学の教科書等，論文，判例・事例等をもとに議論を通じて学習を深める。

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学） 1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance) 1, 3, 5)

西田 亮介 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（政策とメディアの社会学） 2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(Sociology of media and governance) 2, 4, 6)

西田 亮介 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

政策研究，メディア研究，ガバナンス研究，社会課題解決の理論と実践等について，各自の問題意識に基づき，広く学際的なアプローチで探求する。

また関連して必要な，社会学，政治学，行政学，政策研究，メディア論の文献購読を通じて，問題意識，社会科学的思考を深化させる。必要に応じて，研究，実践のプロジェクト等に取り組む。

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄） 1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa) 1, 3, 5)

川名 晋史 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（日米関係と沖縄） 2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(US-Japan Relations: Military Base Problem in Okinawa) 2, 4, 6)

川名 晋史 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

在日米軍基地の問題を通して，日本の安全保障，そして国際社会が抱える問題を考察する。
授業は受講者が主体となって進められる。各人が持ち回りで，具体的なテーマについてリサーチとプレゼンテーションを行う。

ディスカッションに求められるのは建設的な「批判」である。問題点をあぶり出し，それを論理的に分析・議論する技術を養う。

社会科学系ゼミ（心理学） 1, 3, 5

(Seminar on Social Sciences(Psychology) 1, 3, 5)

永岑 光恵 准教授 0-2-0 1Q, 2Q

社会科学系ゼミ（心理学） 2, 4, 6

(Seminar on Social Sciences(Psychology) 2, 4, 6)

永岑 光恵 准教授 0-2-0 3Q, 4Q

現代心理学の基本的な考え方を理解し，個人の問題から社会の問題に対して解き明かしてきた重要な心理学研究の文献

購読を行う。また受講生の関心に応じて、調査・実験などの演習や研究を行い、「こころ」の理解を深めていく。

融合系ゼミ（意思決定論） 1, 3, 5（Seminar on Transdisciplinary Studies(Decision Making) 1, 3, 5）

猪原 健弘 教授 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ（意思決定論） 2, 4, 6（Seminar on Transdisciplinary Studies(Decision Making) 2, 4, 6）

猪原 健弘 教授 0-2-0 3Q, 4Q

受講生は、担当教員と協議して決定した意思決定論に関する課題に取り組む。文献等の調査を通じて課題に関連する事項の理解を深め、討論などを通じて問題を明確化し、解決を図る。課題に取り組むこれらの過程において、それまで学修してきた様々な科目によって身に付けた専門知識及び周辺の基礎知識等を活用して問題を解決する手法を身に付ける。また、データの取得、取得したデータの解析とその考察といった手法に習熟するとともに、複眼的に事物を観る力を養成する。さらに、得られた成果をまとめて報告書を作成し、発表・討論を行う。

融合系ゼミは、学生個々が特定の課題に取り組む研究室教育の中核をなすものであり、体系的カリキュラムに基づくコースワークと相互補完の関係にある。課題に取り組むことにより、意思決定論に関する専門力の向上とともに、新たな課題・問題を発見・設定する力、未解決の問題を解決に導く力など、社会で必要とされる総合的な開発力を身につけることが期待される。

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育） 1, 3, 5

（Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education) 1, 3, 5）

札野 順 教授 0-2-0 1Q, 2Q

本科目では、倫理の原点に立ち返り、人が「よく生きること（well-being）」ことについて、文系・理系の枠を越えて、超際的に検討する。また、最近、国連などでも注目されている「徳倫理学（virtue ethics）」の組織運営への活用方法及び、「志向倫理」を重視する倫理教育・研修のあり方を具体的・実証的に考察する。同時に、「よく生きること（幸せ）」に関する最新の科学的知見を、所謂、ポジティブ心理学や「幸福の経済学」、脳神経科学などの学術領域から学び、自らの「well-being」

を向上させる方法、並びに人と組織がより「よく生きること」を促す倫理プログラムのあり方について調査・研究する。

融合系ゼミ（「Well-being（よく生きること）」の科学と教育） 2, 4, 6

（Seminar on Transdisciplinary Studies(Scientific studies on "well-being" and positive education) 2, 4, 6）

札野 順 教授 0-2-0 3Q, 4Q

科学技術と社会・環境との関係を歴史的・多面的に考察し、現代の高度科学技術社会における科学者・技術者として重視すべき価値を共有する必要性を理解する。科学者・技術者が直面する可能性のある倫理問題を疑似体験し、倫理的意思決定の手法を学ぶ。科目全体を通して、「やっではならない」ことを強調する予防倫理だけでなく、科学者・技術者として「何ができるのか」を考える志向倫理を重視する。また、倫理的科学者・技術者が、社会の福利に貢献するだけでなく、自らの「よく生きること（well-being）」を高めることができることを理解する。加えて、組織において科学者・技術者がいかに行動すべきかを具体的な事例をとおして検討する。

融合系ゼミ(社会科学への量的アプローチ入門) 1, 3, 5

（Seminar on Transdisciplinary Studies (Introduction to Quantitative Approach to Social Science) 1, 3, 5）

毛塚 和宏 講師 0-2-0 1Q, 2Q

融合系ゼミ(社会科学への量的アプローチ入門)2, 4, 6

(Seminar on Transdisciplinary Studies (Introduction to Quantitative Approach to Social Science)2,4,6)

毛塚 和宏 講師 0-2-0 3Q, 4Q

本ゼミでは、文献を輪読し、社会科学の量的アプローチを学ぶ。受講者は、担当箇所に対してレジюмеを作成し、他の受講者がわかるようにプレゼンテーションを行う。